



①将棋盤の裏にある「へそ」は逆ピラミッド型に掘られており、木の狂いを調整しながら、駒音を響かせる音響効果の2つの役割を持つ②盤面にある4つの点は「星」と呼ばれ、目盛りを引いた後に漆で丁寧に星を入れる③碁盤・将棋盤は、最後に溶かした蠟でコーティングを行う。この工程が独特の艶を出し、木の魅力を引き出す④同社初の女性職人である、職人歴1年の今野茜さん。「モノづくりの楽しさを日々感じています」と話す⑤昔から多くの日本人に愛されてきた将棋と囲碁。茨城木工はその大切な遊びを守る役割も担う

国内シェア8割となった3つの理由

現在も将棋盤や碁盤の生産量が国内シェア8割を誇る茨城木工。その盤がヒットした要因は他にも3つあります。

一つ目は盤の目盛りの印刷機を業界で先駆けて開発し、技術革新したことです。漆を使って描かれる碁盤や将棋盤の目は、平ら

ではなく、少し盛り上がっているのがスタンダード。しかし通常の印刷機ではそれが叶わず、手作業でしか行うことしかできませんでした。そこで泉社長が目をつけたのは、テレビの碁盤。大手電子機器メーカーのテレビの碁盤を製造する業者に依頼し、その技術を活用して独自の印刷機器を開発。わずか数秒で線や枠が均等に盛られる盤の製造に成功

したのです。それによって生産性やクオリティーが格段にアップし、瞬く間に世間に受け入れられていきました。

「どんな木々端であっても、目が盛られると命が吹き込まれる。世の中、無駄なものは何もないと思うほど。その瞬間に心打たれて、半世紀近くこの仕事を続けていますよ」

そして二つ目は、原料となる

木材の仕入れ。茨城木工は営業をほとんどせず、泉社長自ら北海道から九州といった国内や、さらには東南アジアまで木材の買い付けに出向き、素材を厳選することで品質とコストバランスを保っています。

「木材はシンプルな素材。素材が良ければ手を加える必要はほとんどなく、逆に手を加えれば悪くなるほど。問屋や消費者に選ばれ続けるためには、その選別は大事な作業ですよ」と力を込めて語ります。

三つ目はルーティンワークを辞め、必要な時に必要なものを作るトヨタ生産方式を導入したこと。一人ひとりの職人たちが川上から川下までのあらゆる作業に取り組みむことで確かな技を磨き、生産効率も向上しました。少数精鋭の職人集団による技と革新によって、高品質な盤が生み出され、大衆に受け入れられていったのです。



茨城木工株式会社
茨城県神栖市矢田部764-10
TEL:0479-48-0034
http://www.ibamoku.com/



巻頭特集

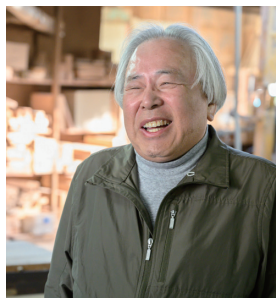
将棋盤・碁盤を全国に広めた茨城木工

木に命を吹き込む

技と革新

将棋駒の産地と言えば山形県天童市、碁石は宮城県日向市。ですが碁盤や将棋盤の産地と云えば、実は茨城県神栖市。碁盤や将棋盤の国内シェア8割を誇る茨城木工は、お手頃価格の折りたたみ式盤から高級品まで幅広く生産し、将棋や囲碁の普及に努めています。

しかし全国各地の職人たちは、一般家庭ではなかなか購入できない高級盤の制作ばかりに力を注ぎ、職人の高齢化や後継者不足など問題が山積みでした。盤が少なくなれば、この先、将棋や囲碁自体が廃れてしまう可能性がある。そこで茨城木工では、娯楽品の販売大手・任天堂

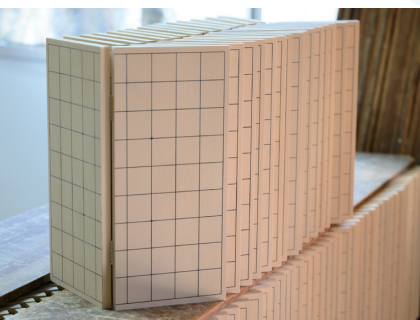


飲食店経営、不動産会社勤務と異色の経歴を持つ代表取締役の泉謙二郎さん

1956年に創業した茨城木工の前身は、地域の特産物であるハマグリの殻を使った碁石の会社でした。原材料となるハマグリの漁獲量の減少に伴い、神栖産の碁石の生産量が激減。生き残りを賭けて事業の抜本的改革が迫られる中、ターゲットにしたのは全く別素材の木を使った碁盤や将棋盤。その理由として、漁業と醤油の街である銚子に隣接していた立地であったことがあげられます。戦後の高度経済成長に伴い、次々と姿を消した木製の漁船や醤油樽。それらの担い手である船大工や大桶職人たちを同社へ引き抜いたのです。そして関西地方の碁盤や将棋盤の職人の指南を受け、茨城木工と名を変えて大きく舵を切ったのでした。

和室や縁側が減った日本人の住宅事情の変化に合わせ、テーブルゲーム化した盤は大ヒット。1980年代には年間80万枚も売り上げ、同社の看板商品となっていたのです。

泉謙二郎社長は「1300年の間、全く形が変わらないゲーム。日本文化の一つとして誰かがどこかで続けていかなければならない。ハードとソフトは表裏一体。業界自体が縮小してしまわないよう、競技の裾野を広げないといけない」という使命感がありました」と当時を振り返ります。



茨城木工を世に知らしめた折りたたみ式将棋盤

競技の裾野を広げる

折りたたみ式盤が大ヒット



高級な碁盤。一つひとつに職人の手仕事光る